

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6月 20日現在

機関番号：12602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21016

研究課題名(和文) 終末期がん患者の嗜好性に着目した心理プログラムの開発

研究課題名(英文) Need for psychotherapy in patients with advanced cancer

研究代表者

市倉 加奈子 (ICHIKURA, Kanako)

東京医科歯科大学・医学部附属病院・非常勤講師

研究者番号：00769044

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は終末期がん患者の心理療法に対するニーズを明らかにすることである。予備調査の結果から終末期がん患者に対して心理職が実施している支援の内容としては、身体・病気・治療に対する困難感の整理が主な話題となることが分かった。また支援の方法としては特定の技法が用いられるというより、支持的に話を聞く、気晴らし方法を一緒に考えるなどの柔軟な対応が中心であった。本調査では、がん患者に対する質問紙調査を実施したところ、心理療法を希望する患者が半数近くであるにもかかわらず、心理療法がどのようなものか分からない、医師に相談できているなどの障壁があることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

終末期がん患者のニーズに関する研究は数多く実施され、心理的ケアを受けたいという希望をもった患者が多いことが明らかにされている。しかし、実際に心理専門職にどのような心理的ケアを受けたいと思っているのか、詳細にニーズを検討した研究はない。本研究では特に昨年度より初めて国家資格化された心理専門職の職務内容に焦点を当てた点が新規的であり、将来的にはがん患者に対する心理療法の適用拡大につながる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to reveal the need for psychotherapy in patients with advanced cancer. The results from a preliminary survey indicate that clinical psychologist bring up a physical-related or health-related topic in their psychotherapy, and conduct a supportive counseling or distraction therapy. In addition, the results from a main self-rated survey indicate that there is a great need for psychotherapy in more than half of patients with advanced cancer. On the other hand, a distrust of psychotherapy or a dense physician-patient relationship is a barrier against psychotherapy visit.

研究分野：臨床心理学

キーワード：がん 心理療法 精神療法 カウンセリング 嗜好性 ニーズ 緩和ケア 終末期

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

終末期とは、「医師が客観的な情報をもとに治療による病気の回復が期待できないと判断した状態」と定義され、特に終末期がん患者は疼痛や骨・脳転移などの影響により、図のように終末期にかけて急激に身体機能が悪化する(Martinez-Selles et al., 2009)。さらに歩行障害・視力障害・認知機能障害といった生活を脅かす問題の出現に苦悩する (Bovero et al., 2015)。また治療不可能と告知された後も、療養先の選択、延命措置希望など多岐に渡る意思決定を迫られる(図)。つまり終末期がん患者において、身体・精神・スピリチュアルなどの側面で、QOL 低下が深刻な問題となる (Hermann et al., 2011)。

終末期がん患者の QOL 改善を目的とした心理療法の中では「ディグニティ・セラピー」のみがシステマティックに効果検証されている (Fitchett et al., 2015)。これは、人生最後に大切な人に大切な物を伝えるという介入技法である。また近年、「意味中心の心理療法」や「ライフレビュー」のように、人生を振り返り、その意味を考えるとという介入技法も効果的であることが示されている (Breitbart et al., 2015; Ando et al., 2010)。しかし日本のがん患者への余命告知は 30%程度で (研究業績-2)、終末期の状態を受容し、人生を振り返る作業は、苦痛が大きい可能性がある。

進行がん患者に対する心理療法の中では、最もエビデンスが蓄積されてきたのは認知行動療法である。これは、現在の苦痛を改善することに主眼に置いて、考え方や行動を変容させる介入技法であり、マインドフルネスなどの新技法も注目されている (Piet et al., 2012)。このように短期的に効果を上げる点が時間の限られる終末期がん患者に有用と考えられるが、セッションの数や課題による負担度が終末期に適応しておらず、日本の実臨床では生かされていない。

2. 研究の目的

上記の通り、先行研究の心理療法を日本の終末期臨床に生かすには多くの課題が残されている。本研究では、回復が期待できない終末期がん患者が、どのような心理療法を好むのか(嗜好性)、そのパターンを明らかにすることを第一の目的とする。さらに、日本人の患者の嗜好性に沿った心理療法プログラムを開発し、QOL 改善効果を予測することを第二の目的とする。最終的には、より多くの終末期がん患者が参加しやすい心理療法プログラムに最適化していくことを目指す。

3. 研究の方法

研究 1: 終末期がん患者における心理療法の嗜好性とその構造: コンジョイント分析を用いて
<研究デザイン> 横断研究デザイン

<対象者> 治療による回復が見込めず、緩和ケアチームに依頼された終末期がん患者 200 名 (適格基準) 20 歳以上、75 歳未満 / 治療選択肢がない / 認知・精神機能障害なし

<質問票 (パターン) の設計>

インタビュー形式の予備調査を患者 4 名 / 心理職 3 名 / 看護師 3 名に対して実施する。その結果をもとに、「頻度 (週 2 回 / 週 1 回 / 隔週 / 月 1 回)」「回数 (1 回 / 3 回 / 6 回 / 10 回)」「内容 (辛さを聴く / 具体的な解決法を一緒に考える / 生きている間にやっておきたいことを整理する / 人生の意味を考える)」などの形で属性と水準が決定される。これらの組み合わせは 44=256 通りとなるため、8 ブロックに分け、32 のパターンで構成された質問票を作成し、このプログラムを「受けたい」から「受けたくない」の 4 件法で回答を求める。

<手続き>

主治医が適格基準を選出し、説明者による同意の得られた患者すべてに質問票を配布。

<統計解析>

コンジョイント分析とは、属性と水準の組み合わせで作成された複数のパターンが提示され、そのシナリオに対する好みを尋ねる質問を繰り返す手法である。本研究では属性を独立変数、4 件法で選択した心理療法の嗜好を従属変数に投入し、コンジョイント分析を行う。

研究 2: 終末期がん患者の嗜好性に合わせた心理療法プログラムの開発: パイロットスタディ

<研究デザイン> 前後比較研究デザイン

<対象者> 治療による回復が見込めず、緩和ケアチームに依頼された終末期がん患者 40 名 (適格基準) 研究 1 に加えて、心理職による介入を希望していること

<心理療法プログラムの開発>

研究 1 で得られた最も好まれる心理療法パターンをもとに、全般的に終末期がん患者に適応できる基本プログラムを作る。具体的には「ディグニティ・セラピー」「意味中心の心理療法」「ライフレビュー」「認知行動療法」を参照しながら、医師 2 名・臨床心理士 2 名・看護師 2 名の計 6 名で議論する。たとえば、「週 2 回」「全 6 回」「具体的な解決法を一緒に考える」が好まれれば、週 2 回 × 6 回 (3 週) の認知行動療法パッケージを開発することになる。研究 1 の嗜好性パターンにばらつきがあれば、選択オプションなどを設けるか検討する。

<手続き>

主治医が適格基準を選出し、説明者による同意の得られた患者すべてにプログラムを実施。

<評価指標>

主要アウトカム：がん関連 QOL (EORTC Quality of Life Questionnaires: EORTC QLQ-C30)

副次アウトカム：精神症状 (Hospital Anxiety and Depression Scale: HADS) /

プログラム満足度 / 安全性指標 (脱落率 / 有害事象出現率 / 死亡率)

<統計解析>

上記の評価指標のうち、連続変数に関しては介入前後の得点変化を t 検定を用いて比較する。また、名義変数に関してはイベント発生率をパーセントで算出する。

4. 研究成果

本研究は終末期がん患者の嗜好性を考慮した心理療法プログラムの開発を目指すものである。研究目的は、積極的治療が終了した終末期がん患者がどのような心理療法を好むのか、その嗜好性パターンについてコンジョイント分析を用いて明らかにし、心理療法プログラムを開発することであった。2018年度は、予備調査として実施した終末期がん患者を支援している心理職および一般精神科患者を支援している心理職に対する調査について、内容分析を実施した結果を学会発表にて報告した。研究結果から、積極的治療が終了した終末期がん患者に対する面接では、話題として身体・病気・治療に対する困難感の整理が挙げられることが分かった。また心理療法としても、特定の技法が用いられるというより、支持的に話を聞く、気晴らし方法を一緒に考えるといった柔軟な方法が用いられることが明らかとなった。一方で、精神科の心理面接で実施されるような面接の枠組みに関する説明や同意、カウンセリングや技法に関する情報提供など、構造化された面接は行われなことが分かった。これらの成果から、がん患者に実施される心理療法について、「頻度」「時間」「金額」「内容」に関する4水準48パターンの心理療法シナリオが作成され、それぞれ「1(受けたくない)」から「5(受けたい)」の5段階で回答を求める質問紙を用いた調査を実施した。2018年度に収集したデータは119件(累積174件)である。一部データからは、心理療法を希望する患者が半数近くであるにもかかわらず、心理療法がどのようなものか分からない、医師に相談できているなどの障壁があることが示され、国内外の学会においては中間報告を行った。ただし目標症例数に到達していないこと、すべての心理療法シナリオに受けたくないと選択した患者がほとんどであったことから、対象者数をさらに増やすべくリクルートを継続している。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

(査読有) TAKEUCHI Takashi, ICHIKURA Kanako, AMANO K, TAKESHITA W, HISAMURA K, The degree of social difficulties experienced by cancer patients and their spouses, BMC Palliative Cancer, 17(1), doi: 10.1186/s12904-018-0338-9, 2018

(査読有) ICHIKURA Kanako, YAMASHITA Aya, SUGIMOTO Taro, KISHIMOTO Seiji, MATSUSHIMA Eisuke, Patterns of stress coping and depression among patients with head and neck cancer: a Japanese cross-sectional study, Psycho-Oncology, 27 (2), 556-562, 2018, doi: 10.1002/pon.4549

市倉加奈子・深瀬裕子・村山憲男・田ヶ谷浩邦, 医療現場における心理専門職の役割と可能性: 公認心理師法施行を受けて, 総合病院精神医学, 30 (3), 258-264, 2018

松島英介・市倉加奈子, がん患者の不安と抑うつ, 精神医学, 60 (5), 455-462, 2018

[学会発表](計3件)

(査読有) ICHIKURA Kanako, TAKESHITA Wakana, FUKASE Yuko, MURAYAMA Norio, TAEHEE Kim, TAGAYA Hirokuni, MATSUSHIMA Eisuke, Worry about social and interpersonal problems associated with motivation for psychotherapy among cancer patients., 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies, Berlin, Germany (July 19th, 2019)

(査読有) TAKESHITA Wakana, ICHIKURA Kanako, OGAWA Yuko, ONO Haruka, MATSUSHIMA Eisuke, SUZUKI Shin-ichi, Barriers to and Facilitators Determining Cancer Patients' Consultation with a Clinical Psychologist: Interim Report of a Questionnaire Survey, 20th World Congress of Psycho-Oncology and Psychosocial Academy, HongKong (November, 2018)

(査読有) ICHIKURA Kanako, YAMASHITA Aya, MATSUOKA Shiho, NAKAYAMA Nao, ARIIZUMI Yousuke, SUMI Takuro, SUGIMOTO Taro, ASAKAGE Takahiro,

MATSUSHIMA Eisuke, Stress coping skill training for patients with head and neck cancer: Interim report of a randomized controlled trial, 19th World Congress of Psycho-Oncology and Psychosocial Academy, Berlin, Germany (August 18, 2017)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕(計 0 件)

出願状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。